

インド密教における建築儀礼

—*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* 和訳(1)—

森 雅 秀

1. はじめに

出家主義を原則としたインド仏教においては、修行僧は宗教実践を目的とする居住施設での生活がつねに義務づけられていた。もちろん、このような居住施設には、ひとりの修行者が夜露をしのぐだけの小さな庵から、何百何千という僧侶が寝食をともにする大僧院まで、その規模はさまざまであった。

1.1 律 (vinaya) の中には比丘の僧房に関して二つの条項がある。僧残法 (saṃgāvaśeṣa) の第6条は、施主などのいない比丘が材料をすべて自分で調達して僧房を作る場合の大きさと場所の規定を行う。つづく第7条は施主が費用を負担して建設される場合で、前項の大きさの規定がはずされて場所のみが限定される。いずれの場合も僧房が完成した後に他の比丘によって検視を受け、もし違法であったならば、罪のざんげと一定期間の謹慎を行わなければならない (Oldenberg 1881: 144–157)。

釈尊の在世中に施主によって寄進された僧房として、われわれが第一に思いうかべるのは、Jetavanārāma すなわち、祇園精舎であろう。豪商 Sudatta がコーサラ国の太子 Jeta の所有地であった園林に黄金をしきつめてこれを買取り、僧団に寄進した話はあまりに有名である (中村 1969: 364)。一般に僧院 (leṇa) は、精舎 (vihāra), 平覆屋 (aḍḍoyoga), 殿楼 (pāsāda), 楼房 (hammiya), 窟院 (guhā) の五種の施設から構成されたが、Jetavanārāma には、さらに房舎 (pariveṇa), 蔵庫 (koṭṭaka), 勤行堂 (upaṭṭhānasālā) など合計21の施設があったといわれる (塚本 1980: 320–321)。

Jetavanārāma の遺構は現在のサヘト・マヘトで発掘されているが、インド国内には大規模な仏教寺院の遺跡が数多くある。紀元前1世紀ごろの造立といわれるバールフトや、塔門彫刻で有名なサーンチー、また南インドでもアマラヴァティーやナーガールジュナコンダが知られている。いずれも仏塔を中心とした大規模な僧院であったことが、その遺構からうかがわれる。仏塔と僧房からなる複合的な形態の大僧院は、ガンダーラやタキシラにおいても一般的にみられる (桑山 1974)。

インドの仏教寺院の遺跡として、このような大僧院とならぶもうひとつの大きな流れは石窟寺院である。アジャンタ、エローラをはじめ、バージャー、カールラー、カーンヘリーなどが

その代表である。主に西インドのマハーラーシュトラ州に集中し、サータヴァーハナ朝に属する前期群と、グプタ朝以降の後期群に二分される(宮治 1981:52)。

8世紀半ばにおこったパーラ朝では、僧院はチベットやネパールなどからの留学僧たちも集まる一種の大学のような性格をもそなえるようになった(Dutt 1962:331-640)。パーラ朝の諸王の勅命で建設されたヴィクラマシーラ、オーダンプリー、ソーマプリーなどの僧院が有名である。グプタ期に建立され、玄奘の『大唐西域記』にも言及があるナーランダ寺院は、パーラ朝の初期に大規模な増改築が行われた。現在、これらの遺構のいくつかが発掘され、当時のすがたをうかびあがらせる。たとえば、ヴィクラマシーラ寺院は方形の構造をもち、その一辺は200メートルにもおよぶ。四方を何百もの房室がとりかこみ、中庭には十字プランの大塔院がそびえたつ(佐和 1982:57)。

このように、出家僧が居住し修行を行っていた僧院や寺院は、僧侶の生活の場として文字どおりインド仏教の基盤をなしていた。その構造は現在残されている遺構からわずかにうかがい知ることができるが、これらの建造物がどのように建設されたのかということはほとんど知られていない。まして、寺院や僧院の建築に際して行われていた儀式や儀礼についての記録は皆無にひとしい。しかしながら、エリアーデ(Eliade, M.)のいうように、寺院や神殿に限らずあらゆる家屋が「世界の模型」「コスモス(宇宙)化された聖なる空間」であり、そのために行われる建築儀礼が「宇宙開闢の模倣」であるとするならば(エリアーデ 1969:47-58)、仏教寺院や僧院の建築儀礼は、数ある仏教儀礼の中でも特に重視されなければならないであろう。

1.2 ここでとりあげる *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* (以下 VA) は、その一部に僧院や寺院の建築儀礼をあつかったサンスクリット文献として注目される。パーラ朝の後期の11世紀から12世紀にかけて活躍した仏教僧 Abhayākara Gupta によって同書は著された(森 1991)。Abhayākara Gupta はヴィクラマシーラ寺院の座主をつとめたことでもよく知られている。VA はサンスクリット写本で平均して百葉以上にもおよぶ浩瀚な文献である。VA のサンスクリット・テキストの校訂本は現在に至るまで刊行されておらず、15本程度の写本が世界各地の研究機関や図書館に点在している。Abhayākara Gupta の他の二著作 *Niṣpannayogāvalī* と *Jyotirmañjarī* とともに密教儀礼に関する三部作を構成し、VA はその中で主幹的な位置を占めている。

VA の冒頭には、VA 全体の項目が著者によって列挙されている。項目数は全部で50にのぼり、それらは以下のとおりである。

- | | |
|----------------------------------|-------------------------|
| 1. Vihārādyarghavidhi | 5. Bhūkhananavidhi |
| 2. Arghādīdānalakṣaṇavidhi | 6. Bhūmiśodhanavidhi |
| 3. Pūrvasevāniyamaprayojanavidhi | 7. Bhūmiparigrahaavidhi |
| 4. Śiṣyasaṃgrahavidhi | 8. Vighnakīlanavidhi |

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 9. Vasundharādhivāsanaṇavidhi | 30. Ācāryābhiṣekaṇavidhi |
| 10. Kalaśādhivāsanaṇavidhi | 31. Mantrasamarpaṇavidhi |
| 11. Devatādhivāsanaṇavidhi | 32. Añjanaṇavidhi |
| 12. Maṇḍalasūtraṇavidhi | 33. Darpaṇābhiṣekaṇavidhi |
| 13. Rajaḥpātanaṇavidhi | 34. Śaraḥṣepaṇavidhi |
| 14. Kalaśanyaśaṇavidhi | 35. Guhyābhiṣekaṇavidhi |
| 15. Sapaṇikaramaṇḍalasādhanaṇavidhi | 36. Prajñāñānābhiṣekaṇavidhi |
| 16. Devatādhivāsanaṇavidhi | 37. Caturthābhiṣekaṇavidhi |
| 17. Pratimāḍipraṇiṣṭhāṇavidhi | 38. Vidyāvraṇavidhi |
| 18. Puṣkariṇyāḍipraṇiṣṭhāṇavidhi | 39. Vajraṇavidhi |
| 19. Ārāmāḍipraṇiṣṭhāṇavidhi | 40. Caryāvraṇavidhi |
| 20. Śiṣyādhivāsanaṇavidhi | 41. Vyākaraṇavidhi |
| 21. Ācāryapraṇeśaṇavidhi | 42. Anujñāṇavidhi |
| 22. Śiṣyapraṇeśaṇavidhi | 43. Āśvāśaṇavidhi |
| 23. Mālābhiṣekaṇavidhi | 44. Svasyābhiṣekaṇavidhi |
| 24. Uḍakābhiṣekaṇavidhi | 45. Homavidhi |
| 25. Mukuṭābhiṣekaṇavidhi | 46. Maṇḍalopaśaṇhārāḍividhi |
| 26. Vajrābhiṣekaṇavidhi | 47. Manaso maṇḍalaṇavidhi |
| 27. Ghaṇṭābhiṣekaṇavidhi | 48. Balividhi |
| 28. Nāmābhiṣekaṇavidhi | 49. Vighṇaṇivāraṇavidhi |
| 29. Trisamayāḍanaṇavidhi | 50. Vajraṇajraghaṇṭālakaṣaṇavidhi |

VA は、そのタイトルに maṇḍalopāyikā (マンダラ儀軌) とあるように、マンダラ (maṇḍala) の制作とそれを用いて行われる灌頂 (abhiṣeka) 儀礼の解説を主題とする。ここで解説されるマンダラは、色のついた砂などで地面の上で描かれる土壇マンダラである。上にあげた50項目のうち、5 から15までがマンダラ制作に、16から44までが灌頂儀礼に相当する。それ以外は、1 から4までが予備的な儀礼や細則をあつかい、45以下は補足的な説明を行う。

1.3 建築儀礼は、1 の Vihāryarghaṇavidhi の中に含まれる。このタイトルは文字どおりには「精舎などへの闍伽水の儀軌」で、また本文中でも「精舎 (vihāra)、香殿 (gandhakuṭi)、仏塔 (caitya)、屋舎 (avasathā)、寺舎 (āśrama) への闍伽水の儀軌」というタイトルでよばれているが、実際には精舎や僧院を建築する直前に行われる一連の儀礼次第がその中で詳述されている。本文中の記述にしたがえば、建築儀礼は二日間にわたって行われ、いくつものプロセスからなる。これらを箇条書にすると次のようになる。

- | | |
|---------------------|---------------------|
| (1) 土地の特徴を調べる | (12) マンダラを観想する |
| (2) 土地の適不適を検査する | (13) 諸尊への偈頌を唱える |
| (3) 尊格の成就法を行う | (14) 穴を掘らせ水を注ぐ |
| (4) マンダラを観想する | (15) 女神ジャーングリーを観想する |
| (5) 土地の使用を諸仏に請願する | (16) 地中を観察する |
| (6) 夢でその結果を占う | (17) 護方神にキーラを打つ |
| (7) 金剛薩埵の成就法を行う | (18) 家屋竜を観測する |
| (8) 土地を聖化(加持)する | (19) 穴を掘って土中の異物を除く |
| (9) 地神をよびだす | (20) 息災のための護摩をたく |
| (10) 地神に土地使用の許可を求める | (21) 慰労の宴を催す |
| (11) 楼閣を観想する | |

(1)と(2)は僧院などを建立するために適当な土地が、どのような形態や条件をそなえているか、またそれはどのように判別するかが紹介されている。

(3)から(16)までが建築儀礼の主要部分である。土地の使用を諸仏、諸尊、大地の女神らにくりかえし請願することによってその許可を得る。同時に土地の聖化(加持)を行い、形態ばかりではなく質的にも僧院などにふさわしいものとする。(17)は建築現場に悪鬼などの妨害者が侵入しないように、周囲の地面にキーラ(kīla)とよばれる、木などで作った小杭を打ち込み、結界する。

(18)の「家屋竜の観測」にある家屋竜(vāstunāga)とは、建築予定の区画に描かれる(あるいは観想される)巨大なナーガ(nāga)である。VAの記述は簡略であるが、同時代の他の文献によれば、このナーガはバードラ月(太陽暦の9~10月に相当)の第一日目には、頭を北東の角に、尾を南西の角にむけて横たわっている。そして一日ごとに少しずつ右まわりに移動し、一年かけて区画内をひとまわりする。施工者はその日の家屋竜の位置から建造物の入口と基礎をすえる場所を決定する。

(20)以降は儀礼全体の終結部である。建築作業中の息災を祈念して護摩がたかれる。(21)では、儀式に参加した者たちへの慰労の宴を開くよう指示される。

1.4 VAの建築儀礼には少なくとも次の三つの要素が認められる。

第一には、インドで一般に行われている建築術である。はじめにあげられる土地の条件や土地の検査方法、あるいは家屋竜の観測は、ヒンドゥー教の伝統に属する、建築術に関するいくつかの文献——これらはシルパ文献(śilpa-sāstra)と総称される——の中にも見出すことができる。教学上のレベルでの仏教とヒンドゥー教という対立図式は、建築術のような実務的なレベルでは必ずしも明りょうではなかったことが予想される。

第二の要素はマンダラ制作のプロセスである。土地の検査、土地使用の請願と土地の聖化、

結界という枠組みは、同時代の多くのマンダラ儀軌やタントラ經典類に共通してみられ、Abhayākara Gupta 自身 VA の後段で用いている。家屋竜の観測方法もこれらの文献の中に含まれている。ここで注意しなければならないのは、もともとマンダラ制作の方法は家屋建築に範をとったものであるということである。すなわち、VA の建築儀礼のある部分は、マンダラ制作儀礼に変容した建築儀礼が、ふたたび建築儀礼に利用されたと考えられるのである。しかし、どこまでがその部分かを明確に示すことは容易ではない。

第三の要素として、観想法や成就法とよばれる、密教独自の瞑想法がある。これは、特定の尊格やマンダラを瞑想の力によって生み出し、これに対して供養を行ったり、神秘的な合一を体験する修行法である。ここでは、土地の使用の請願と土地の聖化の場面でしばしば行われ、土地使用の許可を観想上の諸尊から得ている。この要素が加えられることによって、第一の要素でみたような通文化的な建築儀礼が、精神的な儀礼を重視する密教儀礼へと質的な転換をとげているといえることができる。

2. 使用した写本およびテキスト

2.1 VA のサンスクリット写本は、現在、16本存在していることが知られている。これらはいずれもネパール系の写本である。このうち7本はカトマンドウの国立古文書館 (National Archives, Kathmandu) が所蔵する。同館は、さらに二種類の断簡も所蔵している。これ以外は、ベンガルのアジア協会 (Asiatic Society, Bengal) と東京大学図書館が各二本、ケンブリッジ大学図書館 (Cambridge University Library)、ニューヨークの世界宗教高等研究所 (Institute for Advanced Studies of World Religions) などが、それぞれ一本ずつ所有している。これらの写本のうち、半数以上を占める8本の写本が貝葉 (palm-leaf) でできており、残りが紙製である。断簡はいずれも貝葉写本の一部である。

いくつかの写本は奥書に筆写年代が明記されている。一番古い年代は、ネパール・サンヴァット518年 (西歴1398年に相当) で、ついで549年、650年と続き、もっとも新しいものは今世紀初頭である。断簡のひとつは、サンヴァット492年 (西歴1372年) の奥書を有するが、残念なことに最終葉のみが現存しているにすぎない。

写本の保存状態はいずれもかなり良好である。16本の写本の中には10本の完本が含まれ、さらに二本は八割ないし九割以上の本文が回収しうる。破損や汚濁しているものも少なく、文字も解読しやすい。しかし、ネパール系のサンスクリット写本に一般的にみられる特徴、すなわち、母音の長短の混乱、ヴィサルガやアヌスヴァーラの欠落や付加、あるいは両者の交替、子音の混同などは、程度の差こそあれ、いずれの写本にも例外なく認められる。また r に続く子音の重複もきわめて頻繁に発生する。連声規則から逸脱するケースも多い⁽¹⁾。

各写本の本文の間に大きな相違はなく、流布の過程で特定の章や節、あるいは段落が、意図的に削除されたり、増広された形跡も認められない。しかし、細部の比較、たとえば読みのち

がいや欠落箇所の有無等から、いくつかの写本に関しては親縁関係が認められる。たとえば、東京大学図書館所蔵の写本のひとつ (Matsunami 1965 : No. 361) は、国立古文書館 (カトマンドゥ) が所蔵する、17世紀初頭の写本 (No. 1-222) にきわめて近く、さらに、ケンブリッジ大学図書館の貝葉写本 (Bendall 1883 : Add. 1703) と同類縁関係が確認できる。また、Lokesh Chandra が Śatapiṭaka シリーズの中で公表した写本 (Lokesh Chandra 1977b) は、誤写や誤読を数多く含んでいるが、ネパールの国立古文書館所蔵の、おそらく12世紀に属すると考えられる写本 (No. 3-402) や、アジア協会の二写本のうちのひとつ (Haraprasāda Śāstrī 1917 : G 3855) と同じ系統に属すると見なし得る。しかし、これらは例外的なケースであり、現存する VA の写本のすべてを、いくつかの系統に明確に分類することは、事実上、不可能である。これは、テキストが流布していく過程で数多くの写本が制作され、現在残されているのは、このうちのひと握りにすぎないためと考えられる。しかも、比較的古い年代に属する写本においても異読が多数含まれていることは、写本系統の細分化がテキスト流布の初期の段階から起こっていたことを予想させる。

各写本の主要なデータを以下にあげる。

- (1) 国立古文書館 (カトマンドゥ) 所蔵 (No. 3-402), 貝葉製, 91葉, 完本⁽²⁾。
- (2) 国立古文書館 (カトマンドゥ) 所蔵 (No. 5-841), 貝葉製, 83葉, 完本。
- (3) ベンガル・アジア協会所蔵 (G 3855), 貝葉製, 123葉, 完本 (Haraprasāda Śāstrī 1917 : 94)。
- (4) 国立古文書館 (カトマンドゥ) 所蔵 (No. 3-361), 貝葉製, 132葉, 巻頭および巻末がそれぞれ一、二葉ずつ欠落。
- (5) 国立古文書館 (カトマンドゥ) 所蔵 (No. 3-360), 貝葉製, 83葉, 奥書に Samvat 518 (=1398 AD) の年代, 第1葉より第10葉まで欠落。
- (6) ケンブリッジ大学図書館所蔵 (Add. 1703), 貝葉製, 125葉, 奥書に Samvat 549 (=1429 AD) の年代⁽³⁾, 完本 (Bendall 1883 : 197)。
- (7) ベンガル・アジア協会所蔵 (G 4835), 貝葉製, 96葉, 奥書に Samvat 650 (=1530 AD) の年代⁽⁴⁾, 完本 (Haraprasāda Śāstrī 1917 : 161)。
- (8) 国立古文書館 (カトマンドゥ) 所蔵 (No. 4-20)⁽⁵⁾, 貝葉製, 18葉, 全体の約6分の1のみ残存。
- (9) 国立古文書館 (カトマンドゥ) 所蔵 (No. 1-222), 紙製, 107葉, 奥書に Samvat 729 (=1609 AD) の年代, 第1葉のみ欠落。
- (10) 東京大学図書館所蔵 (No. 351), 紙製, 103葉, 完本 (Matsunami 1965 : 126)。
- (11) 東京大学図書館所蔵 (No. 350), 紙製, 131葉, 完本 (Matsunami 1965 : 125)。
- (12) 世界宗教高等研究所 (IASWR) 所蔵 (No. MBB-I-6), 紙製, 116葉, 奥書に Samvat

1033 (=1913 AD) の年代、完本。

(13) 個人蔵 (Raghu Vira 旧蔵本, Lokesh Chandra によって出版 (1977a)), 紙製, 129葉, 完本。

(14) バローダ・東洋研究所 (Oriental Institute, Baroda) 所蔵 (No. 13189), 紙製, 93葉, 完本 (Bhattacharyya, B. ed. 1950 : 1464-1465)⁽⁶⁾。

以下は断簡である。

(15) 国立古文書館 (カトマンドゥ) 所蔵 (No. 1697 $\frac{2}{7}$), 貝葉製, 奥書に Samvat 492 (= 1372 AD) の年代, 巻末の最終葉。

(16) 国立古文書館 (カトマンドゥ) 所蔵 (No. 4-20), 貝葉製, 第1~4葉。

2.2 つぎにチベット語訳テキストについて。奥書によれば, VA のチベット語への翻訳は, 著者のアバヤーカラグプタ自身と 'Khor lo grags とによってなされ, さらに, 第一回の校訂が著者生存中に Shes rab dpal とによってなされている。奥書には, さらに校訂者として Ratnaraksita, Rāhuraśribhadra, Nyi ma'i dbang po'i 'od zer, Mānikaśrījñāna, Chos rje dpal の名がつづき, そして再校訂者として Blo gros brtan pa の名もみられる。もし, この記述が正しいとすれば, VA はアバヤーカラグプタの生存中に翻訳され, その後, Chos rje dpal が活躍した13世紀前半⁽⁷⁾に至る一世紀あまりのあいだに数回にわたって校訂され, 最終的には14世紀の半ばに, 現在みることのできるテキストに近い形ができあがったと考えられる。

チベット大蔵経テンギル部所収の VA のチベット語訳テキストは, 北京, デルゲ, ナルトンの三版のあいだで, 大きなちがいは認められない。しかし, 同じ系統に属する北京, ナルトンの両版は, デルゲ版に比べると, よりサンスクリット・テキストに近い読みを保ちながらも, つづり字, 助字などの文法的な誤りが数多く見出される。ただし, ナルトン版の場合, このような誤りが, 版木の加工によって修正されている場合が, しばしばある。これは, 校閲の過程での修正であろう。省略形や略つづり字が多用されるのもナルタン版の特徴である。一方, デルゲ版の奥書は, 他の二版のそれよりも記述が簡略であり, 校訂者の中から, Nyi ma'i dbang po'i 'od zer の名が欠けている。

チベット語訳テキストの各版のデータはつぎのとおりである。

(1) 北京版 : TTP, No. 3961, Vol. 80, 79, 1, 1-126, 3, 4.

(2) デルゲ版 : *The Nyingma Edition of the sDe dge bka'-gyur and bstan-gyur sponsored by The Head lama of the Tibetan Nyingma Meditation Centre, Oakland, Dharma Publishing, No. 3140, Vol. 61B, 981, 1-1167, 3.*

- (3) ナルタン版：インド省図書館 (The India Office Library and Records, The British Library, London) 所蔵, No.1956, thu la, 1-109a, 6.

3. 和訳

注記

- 1) 以下に行ったのは Abhayākara Gupta 著 *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* 中の Vihāragandha-kuṭīcaityāvasathāśramārghavidhi のサンスクリット・テキストの和訳である。
- 2) 和訳は、前節で紹介したサンスクリット写本にもとづいて、筆者が校訂したテキスト (未刊) によった。サンスクリット写本の該当箇所は以下のとおりである。(1) 1b, 3-4b, 3; (2) 2a, 3-4a, 4; (3) 2b, 1-5b, 1; (4) 3a, 1-7a, 1; (6) 2b, 3-5b, 5; (7) 2a, 5-4b, 5; (8) 2b, 1-4b, 5; (9) 2a, 5-10a, 1; (10) 2a, 5-4b, 1; (11) 2b, 2-5b, 5; (12) 2b, 3-5b, 3; (13) 3, 7-9, 7; (16) 2b, 2 (?) - 4b, 5。(5)は第10葉まで欠落しているため該当箇所はない。(4)は第2葉まで欠損のため、この章の途中から始まる。(8)は第3葉、および第5葉以下が欠落している。(15)は断簡であり、この章には該当しない。(16)は汚損がはげしいため判読不能である。
- 3) 和訳に際してはチベット語訳テキストも参照した。サンスクリット・テキストとチベット語訳との読みのちがいは註記した。チベット語訳テキストの該当箇所はつぎのとおりである。(1)北京版：81, 3, 5-82, 4, 2; (2)デルゲ版：2b, 5-5a, 1; (3)ナルタン版：3b, 5-6b, 4。
- 4) サンスクリット写本(1), および北京版チベット語訳テキストとの対応を文中に示した。S 2a はサンスクリット写本(1)の第2葉表面の始まりを、T 81, 4 は北京版テキストの第81頁第4葉の始まりをそれぞれ示す。
- 5) 内容の理解をはかるため()内に説明の語句、原語などを入れた。内容に応じて段落を分け、見出しをつけた。翻訳上補った語句は[]内に入れた。

〔精舎、香殿、仏塔、屋舎、寺舎への闍伽水の儀軌⁽¹⁾〕

土地の検査

これらの〔儀軌の〕うち⁽²⁾、吉祥な日の早朝にバリ (bali; 下級の神がみへの施食供養) をはじめに供えてから、精舎などのための土地を検査しなければならない⁽³⁾。

これについては、東にアシュヴァッタ樹 (aśvattha)、南東にアルジュナ樹 (arjuna)、南にプラクシャ樹 (plakṣa)、南西にパラージャ樹 (palāśa)、西にニヤグローダ樹 (nyagrodha)、北西にシャルマリ樹 (śalmali)、北にバクラ樹 (bakula)、北東にウドゥンバラ樹 (udumbara) のはえている土地は〔精舎には〕避けなければならない⁽⁴⁾。亀の甲羅のような形をした土地も避けなければならない⁽⁵⁾。北が高い土地も避けよ。死や財産の損失の原因となるからである。東が高い土地も避けよ。家系 (kula) の没落を招くからである。中央が低い土地も避けよ。成就者 (siddha) の破滅をもたらすからである。王者や神秘的な力の持主 (vidyādhara; 持明者) になることができるという理由から、中央がわずかに高く、色は白く、川が右まわりに流れ、方形で、北東の方角に傾き (T 81, 4)、快適な土地が〔精舎などには〕適している⁽⁶⁾。

1 ヴィタスティ (vitasti; 長さの単位, 約23センチ・メートル) の深さの穴を掘った後⁽⁷⁾, (S2b) 掘った土でその穴を即座に埋めよ。もし土が余れば, その場合, その土地はすぐれていると知れ⁽⁸⁾。

もう一度, 1 ヴィタスティの深さの穴を掘り, その穴に水を注げ。一説によればこの水には水草と生きた魚が入っている⁽⁹⁾。そして, 正確に百歩進み, ひきかえして〔穴を〕検査せよ。もし穴が水で満ちていれば, その土地はすぐれている。もし水が減っていれば, 福德を求めるものたちはその土地を〔精舎などには〕避けよ⁽¹⁰⁾。もし穴の中から音が聞こえたならば, ナーガ (nāga) たちを威嚇せよ⁽¹¹⁾。

土地の請願

⁽¹²⁾ 以上のような土地の特徴をよく理解した師 (ācārya; 阿闍梨) は, 沐浴をすませ, 供養 (pūjā) のための道具を準備せよ。持っている衣裳や装身具などでからだを飾り, 尊格 (devatā) とのヨーガ (yoga) をたくみに観想せよ。

夕方, 矩形で〔一辺が〕4 ハスタ (hasta; 長さの単位, 1 ハスタは約46センチ・メートル), あるいは一説によれば牛の皮の大きさの香マンダラを, その土地の中央に土と牛ふんから作らせよ⁽¹³⁾。その場でマンダラの輪 (cakra) を観想し供養する。各方角へのバリをそなえた後, 地面の上に右ひざをつけ, 両手をあわせ, 十方にいらっしゃる仏, 菩薩, 護世神 (lokapāla) などに対して土地を請い求めよ。

「この三界にいらっしゃる偉大な王たち, 神, ナーガ, ヤクシャ (yakṣa; 夜叉), ガンダルヴァ (gandharva), アスラ (asura; 阿修羅) などに私は懇願いたします。すべての生きとし生けるものの目的を成就するために, 吉祥なるこの土地の一角に僧院を建立するために, 教えを聞き, 思索し, 修習したものたちが, 存在物の本質 (dharmatā) を理解するために, 私なにがしは, なにがしという名を知っていただきたいと思います。もし, あなたがたがお許し下さるならば実行いたします。さもなければ (T 81, 5) 実行いたしません。夢などの徴候を通して私にこの清浄なる土地をお与え下さい⁽¹⁴⁾」

師はこれを三度くりかえさなければならない。

つぎに, (S3a) 左手を顔の前に保った状態で次の夢の呪文 (svapnamāṇavaka) を21回唱えよ。

om mucili svāhā, om mohani svāhā, om dattali svāhā⁽¹⁵⁾

世尊世自在 (Lokesvara)⁽¹⁶⁾ の前に供養を行ってから, 清浄な装身具を身につけ, 南を枕にし東をむいて, 清浄な場所で, 望むだけのあいだ眠れ。もし悪い夢を見た時はアムリタクンダリン

(Amṛtakuṇḍalin; 甘露軍荼梨明王) のマントラ (mantra; 真言) を唱えるか、絶対真理 (勝義諦) においてはすべての存在物には自性がないということを悟るか、あるいは〔前にあげた〕夢の呪文を唱えなければならない。

もし〔夢の中で〕神がみが土地を与えたか、もしくは拒否しなかったならば、師は以下の儀礼を遂行しなければならない。もし拒否したならば、おこなってはならない。

土地の聖別

もし、夢が吉祥なものであったならば、第二日目の早朝に、師は触地印 (bhūsparsamudrā) をして金剛跏趺坐 (vajraparyāṅka) で坐り、金剛薩埵 (Vajrasattva) とのヨーガをする。そして

oṃ bhūh kham

というマントラとともに〔大地が〕空⁽¹⁷⁾ (śūnya) であることを、さらに

hūṃ laṃ hūṃ

というマントラとともに、大地が金剛の原子 (vajraparamāṇu) でできていることを観想せよ。そして

oṃ medinī vajrībhava vajra bandha hūṃ

というマントラで〔大地を〕聖化 (adhiṣṭhāna; 加持) せよ⁽¹⁸⁾。

師は右のてのひらに、月輪にのった三つの 'hūṃ' という文字を観想し、三度 'hūṃ' と唱えよ。'hūṃ' という文字から発した光と指を鳴らした音とその〔'hūṃ' という〕声で大地を活気づけよ。そして、地面から上半身、あるいは全身を出している大地の女神 (pṛthivīdevatā) に、洗足水 (pādya), 口嗽水 (ācamana), 闕伽水をまずはじめに供え、花やその他の供物も供えよ。大地の女神は身体が黄色で、片手に金色の瓶を持ち、もう片方の手で施無畏印 (abhaya mudrā) を示し、全身は美しく飾られている⁽¹⁹⁾。

「女神よ。汝はすぐれたおこない、大地、波羅蜜 (pāramitā) に関して、保護者 (anutāyin) であるすべての仏の証人である。保護者である (T 82, 1) 釈迦族の獅子 (釈尊) が悪魔 (māra) の力にうちかったように、私も悪魔の力をうちやぶり、精舎などを建立しよう⁽²⁰⁾」

師はこのように三度請願せよ。大地の女神が「そのようにせよ」と答え、そこに溶け込み、大地の本質をそなえたと想像せよ⁽²¹⁾。

つぎに 'bhrūṃ' という文字から生じた輪と、'bhrūṃ' という文字から生じた楼閣 (kūṭāgara) とをその地に観想せよ。あるいは、一説によれば、'yaṃ' 'raṃ' 'vaṃ' 'laṃ' 'suṃ' (S 3 b) の各文字を変化させてできた、風、火、水、地の四大元素とスメール山 (sumeru; 須弥山) と、さらにその上に立つ勝者の館 (jinalaya) を師は観想せよといわれる⁽²²⁾。

そこで、師は楼閣の内部に香マンダラを作り、自分の胸の種子 (bija; 単音節の文字) から発した光によって、マンダラの輪と護方神 (dikpāla) などをもよびよせる。洗足水、口嗽水、闍伽水をこれに供え、供養をし、バリを供えた後に、師は 'hūṃ' という文字から金剛でできた舌を生み、香炉を持ち、鈴を鳴らしながら、「世尊よ」で始まり「お近づき下さい」で終わる、後述する偈頌⁽²³⁾を唱えよ。ただし、偈中の「設置」(pratiṣṭhā) という語のところは「精舎」(vihāra) などの「建立する建物の」語におきかえよ⁽²⁴⁾。仏、菩薩、神々、ナーガなどが近づき、虚空が彼らで満ちあふれていると観想せよ⁽²⁵⁾。

師は、後述する降伏の瓶⁽²⁶⁾ (vijayakalaśa)などを設置せよ。もし、施主の力量不足でこれが入手できない時は、中に生きた魚の入った別の瓶を適宜設置せよ。彼は作業員 (karmaka) たちをヴィグナートカ (Vighnāntaka) などの「すべての行為のための尊格⁽²⁷⁾」(sarvakṛddevatā) のすがたに変えよ。この作業員たちは大きさが2ハスタで、深さがその半分(1ハスタ)の矩形の穴を掘れ。さらに「その穴」北東の隅に同じ大きさか、あるいは半分の大きさの(T 82, 2)円形の穴を掘れ。これらの穴に土と牛ふんを塗れ⁽²⁸⁾。つぎに、矩形の穴に、後述する闍伽水のマントラ⁽²⁹⁾を唱えながら闍伽の容器で闍伽水を供えた後、師は矩形の穴に降伏の瓶など適当な瓶から水を注ぎ、穴からあふれさせて円形の穴にも水を満たせ。つぎに、師は水草と生きた魚を水の中に入れ、水が右まわりに流れているのを観察せよ。いちじくの枝を入れ、'jāṃ' という文字から生じた金剛杵から現れたジャングリー (Jāṅgulī) が (S 4 a) 自分自身であると観想せよ⁽³⁰⁾。ジャングリーは身体が黄色で、三面をそなえる。中央の面は黄色、右の面は黒、左の面は白である。頭には七匹の龍でできた傘蓋が広がり、宝冠をつける。六臂を持ち、右の二臂で金剛杵と矢を、左は一臂で弓を持ち、もう一臂は羂索を持ちながら期剋印 (tarjanī) を示す。自分と同じような姿をした配偶神 (upāya; 方便) に包擁されている。色あざやかな衣裳⁽³¹⁾と蛇の装身具を身につけ、二重蓮華 (viśvapadma) と日輪の上に輝きながら坐っている⁽³²⁾。

〔両手で〕蓮華の輪 (kamalāvarta) の形を五回作ってから⁽³³⁾、師は大地の底まで観察し、大地が二重金剛 (viśvavajra) でできていることを観想せよ。師は検視の人びとをキンマの葉、花輪、白檀⁽³⁴⁾で歓待せよ。

眷族、妻子をひきつれた、インドラをはじめとする護方主⁽³⁵⁾ (dikpati) を北東の角に観想し、「すべての儀礼行為のためのマントラ」を百八回唱えた、後述するキーラ (kīla) を、その土地の防御と儀礼の完遂のために、'oṃ gha gha' で始まるマントラをとえながら、彼らの上に

打ちつけよ⁽³⁶⁾。

家屋竜の観測

〔キーラを打ち込むことによって〕土地から妨害者をなくし終えた(T 82, 3)師は、家屋竜⁽³⁷⁾ (vāstunāga)の検査を行え。精舎などが建立される土地を矩形にしてから、その土地の中央に横たわっているなどの家屋竜の特徴を師は観想し、地面の整備⁽³⁸⁾ (bhūsaṃskāra)を行わなければならない。

これについては、バードラ月(bhādra)の第一日目から三箇月ごとに、東、南、西、北に順に頭を向け、それに応じて順次、南等に顔をむけてその土地の中央に横たわっている家屋竜を観察せよ。

金剛拳で糸を手にし、師は助手(uttarasādhaka)とともに右まわりに進んで南東(anala)と北西(anila)の隅にそれぞれが立ち、順に東、西、北、南の線をひけ。彼らはこれを日の出とともに行き、基礎部の穴⁽³⁹⁾を右まわりに掘れ。家屋竜のわきの下から1ハスタはなれたところに穴を掘らなければならない。一説によれば、目から1ダнда⁽⁴⁰⁾ (daṇḍa)のところを掘る。

もし〔誤って〕家屋竜の頭の部分を掘れば、父や子、その他のものたちがけがをする。もし家屋竜の背中を掘れば、彼自身がけがをするか死ぬ。尻尾を掘れば、牛、水牛、その他の家畜がけがをする。土の中に石があれば大風が吹く。骨があれば苦痛がおこる。がれきがあれば口がきけなくなる。穀物や炭があれば熱病になる。毛髪、木根、木片などがあれば小さな(S 4 b)災いがおこる⁽⁴¹⁾。そのため、師は木の株、木の根、昆虫、骨、炭などを土中から取り除かなければならない。

師は大地、火、諸如来、その土地の神(tatsthānādhipati)、護方神、護世神、地方神(kṣetrapāla)を息災の護摩(sāntikahoma)によって満足させよ。土地の所有者や施主のためにも息災護摩を行え。残った物は後述する儀軌どおりにバリとして与えよ(T 82, 4)。力量に応じて僧団(saṃgha; 僧伽)のために食事や宴をもよおせ。師はグル(guru; 教師)にもささげものをせよ。工匠や作業員も歓待せよ⁽⁴²⁾。

以上が、精舎、香殿、仏塔、屋舎、寺舎への闍伽水の儀軌である。

註

(2. 使用した写本およびテキスト)

- (1) ネパール系写本の特徴については Emeneau (1934: X II - X III), Brough (1954: 353-359), George (1974: 9-17) を参照。
- (2) 森口光俊氏は奥書の 'advi' を「202」と読むとされている (Moriguchi 1989: 116)。これをネパール・サンヴァットに理解すれば、西暦1082年となるが、これは VA の写本の筆写年代としてはいささか早過ぎるように思われる。
- (3) Bhattacharyya, D. C. は samvat 249 とするが (1981: 71), これは549のあやまりである。
- (4) Haraprasāda Śāstrī は samvat 250 (=1130 AD) とし、他の研究者もこれに従うが、写本の奥書

を注意深く観察すると、百の位の数字は下半分が欠損しており、上半部から判断して2ではなく6であると考えられる。

- (5) ネパールの国立古文書館は、22葉の貝葉をまとめてこれに No. 4-20 の整理番号をつけているが、これは4葉と18葉の二種類の VA の写本を混合させたものである。4葉の写本はリストの16にあげた。
- (6) この写本は筆者未見である。
- (7) Chos rje dpal の年代は Roerich (1959 : iii-x i) による。

(3. 和訳)

- (1) VA と類似の内容をもち、きわめて密接な関係を有するサンスクリット文献に *Vajrācāryakriyāsamuccaya* (以下 AKS) がある (森 1989 : 236)。VA のこの章に対応する AKS の章は「土地の検査の儀軌」(Bhūmiparīkṣāvidhi), 「家屋竜の検査の儀軌」(Vāstunāgaparīkṣāvidhi), 「精舎等への閼伽水の儀軌」(Vihārādyarghavidhi) の三つである。このうち、第一の「土地の検査の儀軌」は、ほぼ同一の内容が VA の中に見出せるが、次の「家屋竜の検査の儀軌」は VA 中ではきわめて簡略にしか説明されていない。最後の「精舎等への閼伽水の儀軌」は、末尾の部分のみ、VA 中の家屋竜に関する記述に続く段落に内容的には対応している。なお、AKS のサンスクリット・テキストはカトマンドウの国立古文書館の貝葉写本 (No. 4-123) による。この写本は後半部分が欠落しているが、Lokesh Chandra による影印版 (1977a) や東京大学図書館所蔵の写本 (Matsunami 1965 : No. 111) などに比べて、はるかにオリジナルに近い読みを保っていると考えられる。
- (2) Abhayākara Gupta はこの直前に「精舎などへの閼伽水の儀軌」から始まり、「金剛杵と金剛鈴の特徴の儀軌」に至る50項目の儀軌名を列挙している。VA が50の儀軌から構成されていることは、Abhayākara Gupta によって強く意識されていたらしく、他の著作 (*Upadeśamañjarī-nāmasarvatantrōṭṭhannopapañnasāmānyabhāṣya*, TTP, No.5024) においても言及されている (TTP, Vol. 87, 78, 1, 2)。
- (3) この一文は AKS にも含まれる (5a, 1)。
- (4) 同じ規定が AKS にも含まれる (5a, 4f)。また Kuladatta の *Kriyāsaṃgraha* にも同様の記述がある。本稿では *Kriyāsaṃgraha* のテキストは、カトマンドウの国立古文書館が所蔵するサンスクリット写本 (No. 3-366) を参照した。同写本は samvat 337 (=1217 AD) の年代をもつ。この部分の対応箇所は 2b, 3f である。*Kriyāsaṃgraha* については塚本他篇 (1989 : 195-197) を参照。同テキストは Sharada Rani によって影印版写本が刊行されている (1977)。Divākara Candra によるマンダラ儀軌 (TTP, No. 2390, 223, 2, 3 ff) にもこれと同じ規定がみられるが、同書の場合、マンダラを作るために不適当な土地の条件のひとつにあげられている。Durjayacandra もマンダラ儀軌の中で、マンダラのための土地として、これら8種の中の5種の樹木を含む土地を不適当とする (TTP, No. 2369, 142, 3, 4f)。5種の木とは、ウドゥンバラ、ニヤグロータ、アシュヴァッタ、パラージャ、バクラである。この場合、特定の方角との結びつきはみられない。Grhyasūtra (家庭祭祀書) のひとつである *Gobhila-grhyasūtra* 4, 7, 22 以下には、東にアシュヴァッタ、南にブラクシャ、西にニヤグロータ、北にウドゥンバラのはえた土地は、家屋を建築するためには不適当であるという記述がある (Oldenberg 1892 : 122)。
- (5) この規定も AKS (5a, 4), Divākara Candra によるマンダラ儀軌 (223, 3, 3), Durjayacandra のマンダラ儀軌 (142, 3, 4) に含まれる。シルバ文献のひとつである *Mayamata* も、家屋のために不適当な土地をいくつかあげ、そのひとつに「亀の甲羅のように中央の盛り上がった土地」をあげている (Dagens 1985 : 5)。この部分の *Mayamata* の記述は AKS のそれにきわめて近い。

- (6) 土地の特定の位置の高低とそれを避ける理由の関係は、*Vajraḍākatantra* (TTP, No. 18) の中に偈頌の形で次のようにまとめられている (TTP, 134, 5, 5 ff)。

東と北が低い土地は、真言行者に成就 (siddhi) をもたらす。中央が高い土地は王者や神秘的な力の持主の位を獲得させてくれる。北が高い土地は死、あるいは財の損失をもたらす。もしくは病気になる。東が高いといわれる土地は家系の没落を招く。中心が低いという特徴をもつ土地は、成就者の身を減ぼす (shar dang byang du gzhol ba ni // sngags pa rnamz kyi dngos grub 'gyur // dbus su mtho bas rgyal srid dang // rig pa 'dzin pa'i gnas dag 'thob // byang du mtho bas 'chi 'gyur ram // nor rnamz brlag par 'gyur ba ste // yang na nad kyi 'debs par 'gyur // ji skad bshad pa'i shar tho bas // myur du rigs rnamz zad par 'gyur // dbus su dma' ba'i ran bzhin sa // sgrub pa po ni 'joms dang ldan //)。

この偈は、*Dārikapāda* (TTP, No. 2146, 164, 4, 3 ff)、*Prajñārakṣita* (TTP, No. 2186, 263, 1, 7 ff)、*Ariṣṭidhīmat* (TTP, No. 2249, 171, 5, 8 ff)、*Kambala* (TTP, No. 2161, 190, 3, 6 ff)、*Tathāgatavajra* (TTP, No. 2226, 75, 4, 3f)、*Kṛṣṇa* (TTP, No. 2146, 210, 3, 6 ff) らのマンドラ儀軌の中にも引用されている。

好ましい土地の特徴のいくつかは、マンドラを作る場所の特徴としてマンドラ儀軌類の中でしばしば言及される (たとえば *Durjayacandra* (142, 3, 4 f)、*Tathāgatavajra* (75, 4, 3 f))。

なお、VA のチベット語訳テキストでは、土地の高低とその理由との対応が、つぎのようにサンسكريット・テキストと異なる。

「……北東にウドンバラ樹のある土地で亀の甲羅のような土地は避けよ。死や財の損失を招くからである。北が高い土地は避けよ。家系の没落を招くからである。東が高い土地や中央が低い土地は避けよ。成就者を減ぼすからである」 (TTP, No. 3961, Vol. 80, 81, 3, 6ff)

- (7) チベット訳は「ここに1 ヴィタスティの穴を掘った後」と「ここに」(der) の語を加える。
- (8) ツォンカパ Tsong kha pa が『真言道次第』*sNgags rim chen po* (TTP, No. 6210) の中で指摘するように (102, 3, 6 ff)、この判別法は *Sarvamaṇḍalasāmānyaguhyatantra* (TTP, No. 429, 43, 1, 5f) や *Āryavajrapāṇi-abhiṣekamahātantra* (TTP, No. 130, 47, 2, 5f) にもみられる。また、*Prajñārakṣita* (263, 1, 4)、*Kambala* (190, 2, 8 f)、*Durjayacandra* (142, 3, 5 f)、*Divākaracandra* (223, 2, 6 f)、*Kṛṣṇa* (44, 1, 3 f) の各マンドラ儀軌や *Kṛiyāsamgraha* (3 a, 4 f) の中にも含まれる。シルバ文献でも、家屋を建設する前の土地の検査方法として *Mayamata* (Dagens 1985 : 7) や *Mānasāra* (Acharya 1981 : 36) に同様の方法が説かれる。*Āśvalāyanagrhyasūtra* にも同じ判別法がみられる (Oldenberg 1886 : 212)。
- (9) 「水草と生きた魚」(Skt.: śitalijivamatsya; Tib.: nya lcibs dang nya gson) の詳細は明らかではない。この説の典拠も不明である。
- (10) この判別法も *Vajraḍākatantra* (133, 5, 8) や *Vajrapāṇi-abhiṣekamahātantra* のタントラ経典、*Prajñārakṣita*、*Durjayacandra*、*Kṛṣṇa* の各マンドラ儀軌に含まれる (該当箇所は註(8)参照)。*Mayamata*、*Mānasāra*、*Āśvalāyanagrhyasūtra* も同様である。
- (11) AKS には以上の二種類の判別法が VA とよく似た偈頌で登場する (5 a, 6)。ただし「一説によれば... 生きた魚が入っている」の一文は含まれない。
- (12) この箇所より「護方神へのキーラの打ち込み」までは AKS (5 b, 2 ff) にほとんど一致する。
- (13) この部分のチベット訳は意味がよくわからない。AKS には「一説によれば牛の皮の大きさの」

(gocarmamātram ity anenoktaṃ) は含まれない。*Kṛiyāsaṃgraha* には「土と牛ふんによって牛の皮の大きさの矩形の香マンダラを作り」(mr̥dgomayena gocarmamātram caturāśraṃ maṇḍalakam kṛtvā) と、この説に一致する内容があらわれる(4b, 6)。

香マンダラ(maṇḍala あるいは maṇḍalaka) はマンダラを作る前に牛ふんなどによって浄められた地面を指す。香マンダラとマンダラはいずれもサンスクリットでは 'maṇḍala' であるが、チベット訳では前者を音写し、後者を 'dkyil 'khor' と区別をつけることが多い。

- (14) この偈は、Nāgārjuna に帰せられる *Guhyasamājamāṇḍalavidhi* (TTP, No. 2663, 275, 4, 3 ff), Ratnarakṣita による *Samvarodayatantra* (TTP, No. 20) への註釈書 (TTP, No. 2137, 95, 4, 6 f) に含まれる。
- (15) この呪文は、Kṛṣṇa の *Śṛīguhyasamājamāṇḍalopāyikā* (TTP, No. 2683, 43, 5, 1 f) にもあらわれる。
- (16) チベット訳は、一般に 'Lokeśvara' の訳語とされる 'jig rten dbang phyug' を用いず、'lo ge shwa ra' と音写する。
- (17) チベット訳は「空性」(ston pa nyid) である。
- (18) これらの三つのマントラを唱える同じ方法が、VA の別の箇所にも登場する (TTP, Vol. 80, 84, 3, 3 ff)。Dārikapāda (194, 4, 7 f), Nāgārjuna (275, 5, 3 f), Kṛṣṇa (44, 1, 5 f) の各マンダラ儀軌にもあらわれる。はじめの二つのマントラは、Kambala (190, 4, 1 f), Tathāgatavajra (75, 5, 1) のマンダラ儀軌に含まれる。さいごのマントラに類似したマントラが *Vajradākatantra* (134, 1, 5) にある。
- (19) *Vajradākatantra* (134, 1, 1 f) と、Ratnarakṣita による *Samvarodayatantra* への註釈書 (95, 5, 1) にも大地の女神の観想法が言及される。
- (20) 偈頌のさいごの部分「精舎などを建立しよう」の句が「マンダラを描こう」となった偈が VA の別の箇所 (87, 3, 8 f) にあらわれる。
- (21) 「そこに溶け込み」以下の主語は大地の女神であるのか、観想者自身であるのか明確ではない。チベット訳はその前の「答え」に対し 'gsungs' という敬称を用い、「そなえた」に対しては非敬称の 'gnas' をあてていることから、観想者を行為主体に理解していると考えられる。
- (22) 「あるいは一説によれば」から「観想せよといわれる」までは AKS には含まれない。四つの種子から四大を観想する方法は、*Samvarodayatantra* (Tsuda 1974: 114–115) に登場する。津田真一氏による校訂本の訳註には *Abhidhānottaratantra* (TTP, No. 17, 45, 2, 1) にも類似の表現があることが指摘されている。
- (23) VA には「世尊よ」(bhagavan) で始まり「お近づき下さい」(sāṃnidhyam kartum arhatha) で終わる偈頌は、この後二回あらわれる。(TTP, Vol. 80, 89, 3, 8 ff; 109, 2, 5 ff)。このうち、次註に述べるように、'pratiṣṭhā' の語を含むのは後者 (109, 2, 5 ff) の方である。なお AKS は省略せず、偈頌の全文をあげる (6b, 4 ff)。
- (24) 前註の偈頌は全部で 6 偈からなる。このうち第 5 偈の後半は amuko 'haṃ mahāvajrī pratiṣṭhām amukasya tu // (偉大な金剛の保持者である私にながしは、なにがしの設置を〔行う〕) である。この中の 'pratiṣṭhā' の語を、ここでは、'vihāra' など建設予定の建造物名に変えて偈頌を唱えよという指示である。なお AKS では 'pratiṣṭhām' の部分は、'arhaṃ caiva' (闍伽水を) になっている (6b, 1)。
- (25) AKS には「仏、菩薩……満ちあふれていると観想せよ」に対応する部分は含まれない。
- (26) 「降伏の瓶」とよばれる瓶の規格は、TTP, Vol. 80, 87, 5, 5 以下に説明されている。
- (27) あるマンダラが制作される時、そのマンダラ中の特定の一尊が「すべて行為のための尊格」とよばれ、この尊格のマントラが後出の「すべての行為のためのマントラ」(sarvakṛmmantra) である。Abhayākara Gupta の主著のひとつである *Niṣpannayogāvalī* では、Vighnāntaka の他に Vajraghaṇṭā,

- Vetālī, Ghasmarī, Vajrāmṛta, Viśvaḍākinī, Buddhakapāla, Yamāri, Vajratārā, Vajrayakṣa, Amṛtakunḍalin, Vajrāveśa, Bhūtaḍāmara, Khaṇḍaroha などがこの尊格としてあげられている (Bhattacharyya 1972 : 11 etc.)。
- (28) 二種類の穴を掘り、これに土と牛ふんを塗るという記述は、*Kriyāsaṃgraha* にもみられる (16b, f)。
- (29) 閼伽水のマントラとは 'oṃ āḥ hrīḥ pravaraśatkāram argham praticcha hūṃ svāhā' である。洗足水や口嗽水などを供える時には、'argham' のかわりに 'pādyam' 'ācamanam' など水の種類に応じた語を挿入して唱える。閼伽水については、VA 中の Arghādīdānalakṣaṇavidhi (TTP, Vol. 80, 82, 5, 6 ff) に詳しい。
- (30) この部分のチベット訳は「[師は] 自分自身が、'jām' という文字から生じた金剛杵であり、'jām' という文字から生じたジャーングリーであると観想せよ」である。
- (31) チベット訳は「さまざまな衣裳」である。
- (32) ジャーングリーの図像的特徴に関する類似の記述が *Kriyāsaṃgraha* の中にある (17a, 1 ff)。ジャーングリーの成就法が『成就法鬘』*Sādhanaṃālā* の中に七種含まれ (Bhattacharyya 1968 : Nos. 106, 117 ~ 122), このうち第117番と第119番に登場するジャーングリーがやはり三面六臂である。しかし、持物の一部が VA のものとは異なる。『成就法鬘』の記述によれば、この尊格は毒蛇除けの女神としての性格をもつ。ジャーングリーの作例は Clark (1965 : 204, 281, 283), Lokesh Chandra (1986 : No. 181) にある。
- (33) この箇所は訳者には、意味が明らかではない。
- (34) チベット訳は「白檀など」と「など」(la sogs pa) の語を加える。
- (35) 護方神(護方主)は、八方向あるいはこれに二方向を加えた十方を守るヒンドゥー教の神々である。地域と時代によって神々の組み合わせは異なる (石黒 1986)。VA では以下の神々によって構成されている (TTP, Vol. 80, 87, 1, 2 ff)。Indra (東), Yama (南), Varuṇa (西), Kubera (北), Īśāna (北東), Agni (南東), Nairṛti (南西), Vāyu (北西), Brahman (上), Vemacitrin (下)。
- (36) キーラを用いた結界法は VA 中の Vighnakīlanavidhi (86, 4, 5 ff) に説かれている。「すべての行為のためのマントラ」については訳註(27)参照。'oṃ gha gha' で始まるマントラ全文は以下のとおりである。'oṃ gha gha ghātaya ghātaya sarvaduṣṭān phaṭ phaṭ kilaya sarvapāpān phaṭ phaṭ hūṃ hūṃ hūṃ vajrakīla vajradharo ājñāpayati sarvavighnānām kāyavākcittam kilaya hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ' このマントラは *Guhyasamājatantra* にも登場する (Matsunaga 1978 : 69)。
- (37) 家屋竜については、Wayman がツォンカパの『真言道次第』にもとづいてかなり詳しい説明をこころみている (Lessing & Wayman 1978 : 280-281)。ツォンカパは「Vibhūti からの引用である」と断った上で、家屋竜に関する長文の解説をあげる (103, 3, 8 ff)。Wayman は「Vibhūti の著作」とはおそらく Vibhūticandra による *Piṇḍikṛtasādhanaḥaṇjīkā* (TTP, No. 2701) であろうと述べているが、実際にはこのテキストには該当する記述は含まれていない。また、Vibhūti(candra) の他の著作にも該当するものは見当たらない。ツォンカパが『真言道次第』の中に引用する家屋竜に関する記述は、Tathāgatavajra によるマンドラ儀軌 (TTP, No. 222, 74, 5, 4 ff) や AKS 中の Vastunāgaparīkṣāvidhi に見出すことができる。このうち、Tathāgatavajra の著作は Vibhūticandra によってチベット語に翻訳されており、ツォンカパはこれを混同したのかもしれない。
- これらのテキストとは異なる表現で家屋竜について詳しく説明するのは *Kriyāsaṃgraha* である (29 b, 3 ff)。この他に、Prajñārakṣita (263, 1, 6 ff), Durjayacandra (142, 4, 2 ff), Divākaraśāstra (223, 4, 2 ff) の各マンドラ儀軌にも家屋竜についての言及があることがツォンカパによって指摘されているが (103, 4, 1), ツォンカパも述べているとおり、いずれも簡単な記述にとどまっている。

シルパ文献のひとつである *Śilpaprakāśa* には, *nāgabandha* とよばれる, 家屋竜とほとんど同じ特徴をもったナーガが登場する (Boner & Sadāśiva 1966: 14-15, 131-132)。このナーガもやはり家屋建築予定地に描かれ, これによって家屋の入口の位置が決定される。*Śilpaprakāśa* は, 9世紀から12世紀のあいだにオリッサ地方で編さんされたといわれ (Boner & Sadāśiva 1966: XIX), 時代, 地域とも VA に近い。一般に, ヒンドゥー教の伝統では, 建築予定地に描かれる図案はナーガではなく, *vāstupuruṣamaṇḍala* とよばれる人体図である。これは Varāhamihira の *Bṛhatsaṃhitā* (Bhat 1981: 450-498) などに説かれ, Kramrisch (1949: 29-49) や Apte (1984) らによる研究もある。

家屋竜の伝統はチベットやネパールの寺院建築においても生き続けていたことが, 後世の文献によって知られる (Jest 1981: 27-28)。Pal はネパールの写本に描かれた家屋竜の図面を紹介している (1981: 165)。

- (38) Gonda によれば「地面の整備」とは, シュラウタ祭式において 'khara' とよばれる塚を地面に作る五つの段階を指すことばである。五つの段階とは, 1) 地面を三度掃き清める, 2) 牛ふんを塗布する, 3) 東西と南北にそれぞれ三本ずつの線をひく, 4) 線の内側の不純物を除去する, 5) その上に三度, 水をまく (Gonda 1980: 232-3)。
- (39) 「基礎部の穴」はチベット訳 'rtsig rmang' にしたがった訳語である。サンスクリット・テキストの 'gartāpūra' の意味は不明。
- (40) この箇所は訳者には意味が明らかではない。'daṇḍa' は Monier-Williams の *Sanskrit English Dictionary* によれば, 長さの単位のひとつで, 1 daṇḍa は 4 hasta に相当する。チベット訳は「[家屋竜の] 目の前の部分を掘る」である。この説の典拠も不明である。
- (41) 誤って掘った部分と災厄については, AKS にさらに詳しい記述がある。土中の不純物と災厄とについても VA とほぼ同一の内容が AKS に含まれる (9a, 1 ff)。
- (42) 工匠と作業員の歓待について AKS はさらに詳しく述べる (12a, 2 ff)。

略号

AKS : *Vajrācāryakriyāsamuccaya*.

TTP : 『大谷大学図書館所蔵影印北京版西藏大蔵経』 鈴木学術財団。

VA : *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā*.

参考文献

チベット語文献

Abhidhānottaratāntra, TTP, No. 17, Vol. 2, 40, 5, 3-93, 2, 7.

Āryavajrapāṇyabhiṣekamahātāntra, TTP, No. 130, Vol. 6, 33, 1, 1-97, 1, 3.

Śrīmahāsamvarodayatantrarāja, TTP, No. 20, Vol. 2, 202, 3, 8-221, 5, 7.

Śrīvajradāka-nāma-mahātāntrarāja, TTP, No. 18, Vol. 2, 93, 2, 7-145, 3, 5.

Samputa-nāma-mahātāntra, TTP, No. 26, Vol. 2, 245, 5, 2-280, 2, 5.

Sarvatathāgata kāyavākīcittarahasyo guhyasamāja-nāma-mahākālparāja, TTP, No. 81, Vol. 3, 174, 3, 5-203, 1, 8.

Sarvamaṇḍalasāmānya-guhyatantra, TTP, No. 429, Vol. 9, 42, 5, 4-53, 1, 1.

Abhayākara Gupta, *Upadeśamañjarī-nāma-sarvatantratṭhannopapannasāmānyabhāṣya*, TTP, No. 5024, Vol. 86, 77, 4, 5-86, 2, 4.

_____, *Niṣṭhannayogāvalī*, TTP, No. 3962, Vol. 80, 126, 3, 4-154, 2, 8.

- _____, *Śrīmañjuvajrādikramābhisamayāsammuccayanīṣṇanayogāvalī*, TTP, No. 5023, Vol. 87, 47, 5, 6–77, 4, 5.
- Aṣṭidhīmat, *Śrīcakrasamvarodaya-nāma-maṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2249, Vol. 52, 164, 3, 6–180, 4, 2.
- Kambala, *Śrīcakrasamvaramaṇḍalopāyikā-ratnapradīpodyota*, TTP, No. 2161, Vol. 51, 189, 5, 5–201, 1, 8.
- Kuladatta, *Kriyāsamgraha*, TTP, No. 3354, Vol. 74, 106, 2, 4–170, 2, 6.
- Kṛṣṇa, *Śrīguhyasamājamāṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2683, Vol. 62, 43, 4, 3–49, 2, 4.
- Tathāgatavajra, *Śrīsamvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 74, 1, 7–85, 5, 3.
- Darpaṇa (Jagaddarpaṇa) *Vajrācāryakriyāsammuccaya*, TTP, No. 5012, Vol. 86, 222, 5, 7–322, 1, 5.
- Dārikapāda, *Śrīcakrasamvaramaṇḍalavidhi-tattvāvatāra*, TTP, No. 2146, Vol. 51, 164, 1, 7–171, 5, 2.
- Divākaracandrapāda, *Śrīherukabhūta-nāma-maṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2390, Vol. 56, 222, 4, 7–246, 4, 6.
- Durjayacandra, *Suparigraha-nāma-maṇḍalopāyikāvidhi*, TTP, No. 2369, Vol. 56, 142, 2, 4–154, 1, 4.
- Prajñārākṣita, *Śrīcakrasamvaramaṇḍalavidhi-samgraha*, TTP, No. 2186, Vol. 51, 262, 4, 1–268, 1, 6.
- Ratnarākṣita, *Śrīsamvarodayamahātāntrarājasya padmini-nāma-pañjikā*, TTP, No. 2137, Vol. 51, 71, 1, 1–119, 2, 6.

Tsong Kha pa Blo bzang grags pa, *rGyal ba Khyab bdag rdo rje 'chang chen po'i lam gyi rim pa*, “gSang ba kun gri gnad mnam par phye ba” (sNgags rim chen po), TTP, No. 6210, Vol. 161, 53, 1, 1–226, 2, 7.

欧文および和文文献

Acharya, Prasanna Kumar

1979 (1934) *Mānasāra on Architecture and Sculpture*, Sanskrit Text and Notes. Mānasāra Series Vol. 3, New Delhi: Oriental Books Reprint Corporation.

1980 (1934) *Architecture of Mānasāra*. Mānasāra Series Vol. 4, New Delhi: Oriental Books Reprint Corporation.

1981 (1934) *Indian Architecture According to Mānasāra-Śilpashāstra*. Mānasāra Series Vol. 2, New Delhi: Oriental Books Reprint Corporation.

Apte, P. P. & Supekar, S. G.

1984 *Vāstupuruṣamaṇḍala in the Pauṣkarasaṃhitā and Bṛhat-saṃhitā* In K. K. A. Venkatachari (ed.) *Āgama and Śilpa*, Ananthacharya Indological Research Institute, pp. 132–148.

Bendall, Cecil

1883 *Catalogue of Buddhist Sanskrit Manuscripts*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bhat, Ramakrishna M.

1981 *Varāhamihira's Bṛhat Samhitā*, 2 vols.. Delhi: Motilal Banarsidass.

Bhattacharyya, Benoytosh

1968 (1925) *Sādhana-mālā*, 2 vols.. Gaekward's Oriental Series Nos. 26, 41. Baroda: Oriental Institute.

1972 (1949) *Nīṣṇanayogāvalī of Mahāpāṇḍita Abhayākara-guṇa*. Gaekward's Oriental Series No. 109. Baroda: Oriental Institute.

Bhattacharyya, Benoytosh (ed.)

1950 *Alphabetical List of Manuscripts in the Oriental Institute, Baroda*, Vol. 2. Gaekward's Oriental Series No. 114, Baroda: Oriental Institute.

Bhattacharyya, Dipak Chandra

1981 *The Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā of Abhayākara-guṇa*. In *Tantric and Taoist Studies in Honor of R. A. Stein*, Bruxelles: Institute Belge des Hautes Études Chinoises, pp. 70–95.

- Boner, Alice and Sadāśiva Rath Śarma
 1966 *Śilpa Prakāśa, Mediaeval Orissan Sanskrit Text on Temple Architecture*. Leiden: E. J. Brill.
- Brough, John
 1954 The Language of the Buddhist Sanskrit Texts. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 16: 351-375.
- Clark, Walter Eugene
 1965 (1937) *Two Lamaistic Pantheons*. New York: Paragon Book Reprint Corp..
- Dagens, Bruno
 1976 *Mayamata: traité sanskrit d'architecture*. Publication de l'Institut Français d'Indologie No. 40, Pin-dichéry: Institut Français d'Indologie.
 1985 *Mayamata, an Indian Treatise on Housing Architecture and Iconography*. New Delhi: Sitaram Bhartia Institute of Scientific Research.
- Dutt, Sukumar
 1962 *Buddhist Monks and Monasteries of India*. London: George Allen and Unwin.
- エリアーデ, ミルチャ
 1969 『聖と俗』 風間敏夫訳 法政大学出版局。
- Emeneau, M. B.
 1935 *Jambhaladatta's Version of the Vetālapañcaviṃśati*. American Oriental Series. Vol. 4. New Haven: American Oriental Society.
- Forman, Robert K. C.
 1985 The Hindu Temple, the Metaphysical Architecture of the Kandriya Mahādeva. *Man in India* 65 (2) : 154-176.
- George, Christopher S.
 1974 *The Caṇḍamahāroṣana Tantra, a Critical Edition and English Translation, Chapters I-VIII*. New Haven: American Oriental Society.
- Gonda, J.
 1980 *Vedic Ritual, the Non-Solemn Rites*. Leiden: E. J. Brill.
- Haraprasāda Śāstrī
 1917 *A Descriptive Catalogue of Sanskrit Mss. in the Government Collection under the Care of the Asiatic Society of Bengal, Buddhist Mss.*. Calcutta.
- 早島鏡正
 1964 『初期仏教と社会生活』 岩波書店。
 [The Institute for Advanced Studies of World Religions]
 1975 *Buddhist Sanskrit Manuscripts, a Title List of the Microfilm Collection of the Institute for Advanced Studies of World Religions*. New York: The Institute for Advanced Studies of World Religions.
- 石黒 淳
 1986 「ヒンドゥー教の護世神」『論叢仏教美術史』 吉川弘文館, pp. 109-128.
- Jest, Corneille
 1981 *Monuments of Northern Nepal*. Paris: UNESCO.
- Kramrisch, Stella
 1949 *The Hindu Temple*, 2 vols. Calcutta: University of Calcutta.
- 桑山正進

- 1974 「タキシラ仏寺の伽藍構成」 『東方学報』 46: 327-335.
- Lessing, Ferdinand D. and Wayman, Alex
- 1978 (1968) *Introduction to the Buddhist Tantric System*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Lokesh Chandra
- 1986 *Buddhist Iconography of Tibet*. Kyoto: Rinsen.
- Lokesh Chandra (reproduced)
- 1977a *Kriyāsamuccaya*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 237, New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- 1977b *Vajrāvalī*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 239, New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- 1981 *Abhidhānottara-tantra*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 263, New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Matsunaga, Yūkei
- 1978 *The Guhyasamāja Tantra, a New Critical Edition*. Osaka: Toho Shuppan.
- Matsunami, Seiren.
- 1965 *The Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*. Tokyo: Suzuki Research Foundation.
- 宮治 昭
- 1981 『インド美術史』 吉川弘文館。
- 森 雅秀
- 1989 「『完成せるヨーガの環』 (*Niṣpanmayogāvalī*) 第21章 「法界語自在マンドラ」 訳およびテキスト」 『国立民族学博物館研究報告別冊』 7: 235-282。
- 1991 「Abhayākara-gupta のマンドラ儀軌 *Vajrāvalī*」 『印度学仏教学研究』 39 (2) (刊行予定)。
- Moriguchi, Mitutoshi
- 1989 *A Catalogue of the Buddhist Tantric Manuscripts in the National Archives of Nepal and Kesar Library* Tokyo: Sankibou Busshorin.
- 中村 元
- 1969 『ゴータマ・ブッダ——釈尊の生涯——』 春秋社。
- Oldenberg, H
- 1881 *The Vinaya Piṭaka*. Vol. III. London: William's and Norgate.
- 1886 *The Gṛhyasūtra*. part 1 & 1892 part 2. Oxford: Oxford University Press.
- Pal, Pratapaditya
- 1985 *Art of Nepal*. A Catalogue of the Los Angeles County Museum of Art Collections. Los Angeles: Los Angeles County Museum of Art.
- 佐和隆研 (編)
- 1982 『密教美術の原像』 法蔵館。
- Sharada Rani (reproduced)
- 1977 *Kriyāsaṃgraha*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 236. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Tsuda, Shinichi
- 1974 *The Samvarodaya-tantra, Selected Chapters*. Tokyo: Hokuseido.
- 塚本啓祥
- 1980 『初期仏教教団の研究』 山喜房仏書林。

塚本啓祥, 松長有慶, 磯田熙文

1989 『梵語仏典の研究 IV 密教經典篇』 平楽寺書店。